

「キャンパス・アジア」モニタリング

自己分析書

平成25年5月

「日中韓先進科学技術大学教育環」

東京工業大学

<目次>

I	構想にかかる基本情報および目的、進捗状況	
1.	基本情報	1
2.	構想の目的、概要、進捗状況	1
II	基準ごとの自己分析	
基準1	教育プログラムの目的	4
基準2	教育の実施	
基準2-1	実施体制	6
基準2-2	教育内容・方法	8
基準2-3	学習・生活支援	10
基準2-4	単位互換・成績評価	12
基準3	学習成果	14
基準4	内部質保証システム	16

I 構想にかかる基本情報および目的、進捗状況

1. 基本情報

1. 大学名	東京工業大学	
2. 構想名称	【和文】	日中韓先進科学技術大学教育環
	【英文】	TKT CAMPUS Asia Consortium
3. 取組学部・研究科等名	全学〔理学部、工学部、生命理工学部、理工学研究科、生命理工学研究科、総合理工学研究科、情報理工学研究科、社会理工学研究科、イノベーションマネジメント研究科〕	
4. 海外の相手大学	【中国】	清華大学
	【韓国】	韓国科学技術院 (KAIST)

2. 構想の目的、概要、進捗状況

構想の目的及び概要

○ 構想の目的

本学は、「世界最高の理工系総合大学の実現」を長期的な目標としているが、このためには、世界の最高水準の理工系大学との連携協力が不可欠である。この連携協力の取り組みのひとつとして、本学は、東アジアの最高水準の理工系大学である中国の清華大学、韓国の韓国科学技術院（KAIST）との間で人材の育成を目的とした教育研究プログラムを実施する。なお、このプログラムは、本学が長期的な目標の下、米国、ヨーロッパ、そして他のアジア地域における最高水準の理工系大学との間で行う教育研究の連携協力構想と一体的に実施される。本構想の目的は、以下の三点である。

- ① 交流プログラムの経験を通して培われる、将来の科学技術分野における国際的なキャリア形成に向けた動機づけ
- ② 世界最高水準の研究活動と一体化した教育を通して行われる、卓越した科学技術の素養を持つグローバル人材の育成
- ③ 教育制度の異なる大学間における質の高い教育および研究の協力の枠組みの構築（特に大学院レベルにおける国際的な質の保証制度の確立に向けた取り組み）

○ 構想の概要

上記の目的を達成するため、本構想ではそれぞれの目的に対応させた形で、「（１）学部学生及び大学院修士課程学生を対象とし、科目履修および研究室での実験等を通じた国際的な経験を積むことを目的とした教育プログラム（以下、「国際経験型教育プログラム」と呼ぶ。）」、「（２）大学院課程（修士、博士）学生を対象とした研究を重点に置いた教育プログラム」、そして「（３）共同プログラムの実施における質の高い履修成果の認定および研究成果の評価の枠組みの構築」として実施する。

「（１）国際経験型教育プログラム」は、学部の３年次終了以上の者および修士課程学生を対象としたプログラムで、「(a) セメスター単位の科目履修や研究室での実験等のプログラム」と、「(b) 研究経験を含むサマープログラム」により構成される。多くの学生は、はじめて国際的な機会に触れること

を念頭に、派遣先の国の文化や言語を学び、また、科目履修や実験室での小規模な研究プロジェクトの遂行を通じ、国際的なキャリア形成に向けた動機づけとなるよう制度設計がされている。

「(2) 大学院課程(修士、博士)学生を対象とした研究を重点に置いた教育プログラム」は、「(c) 大学院課程研究重視型教育プログラム」との呼称で実施するもので、3大学間の研究室の間の研究を中心とした関係の中において大学院の教育課程の一部を組み込むことにより、参加学生が研究の視野を広げ、高い成果を挙げることを目的に計画されたプログラムで、学生は2大学(または3大学)の教員から共同で指導を受けることにより学位(いわゆるデュアルディグリーを含む)の取得に向けた研究を行う。

これら(1)、(2)のいずれのプログラムも、3大学の共通の認識のもと、合同委員会(**Joint Committee**)を設置し、「(3) 共同プログラムの実施における質の高い履修成果の認定および研究成果の評価の枠組みの構築」を遂行する。3大学は、それぞれが独自の質の保証の制度を有し、これに基づき高い水準の教育を行っている。それぞれの質の保証の制度については、必ずしも3大学間で共通化できるものではないが、上記「(1) 国際経験型教育プログラム((a)および(b))」、および「(c) 大学院課程研究重視型教育プログラム」の実施にあたっては、いずれの大学の質の要件も満たす形で実施する。また、参加学生の履修成果の認定や研究成果の評価においては、相手大学の質の保証制度を尊重したうえで、自身の大学においてその成果を適正に読み替える制度を整えることにより、高い教育研究効果を上げることができるようにする。

○ 平成24年度末までの取組状況

基準1 教育プログラムの目的に関する取組状況

「平成23年度 大学の世界展開力強化事業 構想調書【タイプA：キャンパス・アジア・中核拠点形成支援】」において本学は「世界最高の理工系総合大学の実現」を長期的な目標として掲げている。このためには、世界最高水準の理工系大学との連携協力が不可欠である。この連携協力の取り組みのひとつとして、本学は、東アジアの最高水準の理工系大学である中国の清華大学、韓国の韓国科学技術院(KAIST)との間で人材の育成を目的とした教育研究プログラムを平成24年度より本格的に開始した。なおこのプログラムは、本学が長期的な目標の下、米国、ヨーロッパ、そして他のアジア地域における最高水準の理工系大学との間で行う教育研究の連携協力構想と一体的に実施されるものである。昨年度はサマープログラムという形で、一体的な学生の受入れの取り組みを行った。

基準2-1 実施体制に関する取組状況

a) 組織体制

- 1) 平成23年度に本補助事業により作成した外国人学生向けの日本語教育プログラム・教材を活用した。
- 2) 3大学による合同委員会(**Joint Committee**)を開催し、プログラム実施に係る具体的状況を検証し、今後の改善、特に**Implementation Guidelines**の締結に向けて協議した。また、本学の関係教職員が相手先大学で開催されたワークショップに参加し、プログラムの具体的な実施に関する協議を行った。

b) 教職員

- 1) 本事業運営規則を制定し、本事業の企画・立案・実施について審議する運営委員会及び部会を設

置、毎月各1回程度開催した。プログラム運営体制を整え、国際連携プランナー、プログラム・コーディネータ、留学アドバイザー、事務員を雇用した。これら教職員は英語はもちろん、中国語による対応も可能で欧米で教育を受けた経験を持つものが多数である。

基準2-2 教育内容・方法に関する取組状況

- 1) 平成24年6月-8月、本学でサマープログラムを中心とした研究体験型海外教育プログラム等を実施し、相手大学の学生を受入れた。さらに、個々の学生の目的に応じ、引き続きセメスター単位で受入を行った。

基準2-3 学習・生活支援に関する取組状況

a) 学習支援

- 1) 外国人学生の出願手続きを一部オンライン化し、就学に当たって必要な書類の英文化の充実を図った。
- 2) 清華大学、KAIST との間で学生提出用として共通に使用する **Study and Research Plan/Record** の様式を整え、受入れ・派遣双方向において利用を促進した。

b) 生活支援

【受入れ】

- 1) 新たに来日する留学生に対しては、受入れを依頼する研究室にチューターの選定を依頼、決定後は事前説明会等のチューター教育を行い、修学・生活支援を行った。
- 2) 学生のカウンセリングは従前より学生支援センター生活支援部門において日本人・外国人の分け隔てなく実施した。
- 3) 本プログラムによる留学生向け民間宿舎について検討・比較を行い、契約を行った。
- 4) 留学生向け宿舎・生活関連オリエンテーションなどを実施した。
- 5) 留学生に対する奨学金支給と宿舎の無償提供を行った。

【派遣】

- 1) 留学前・中、そして帰国後の情報提供・相談の充実と関連部署との連携強化を行った。
- 2) 留学の際しての安全対策の周知徹底を行った。

基準2-4 単位互換・成績評価に関する取組状況

- 1) 3 大学 での協議を通じ **Implementation Guidelines** をまとめ単位互換についての合意に達した。
- 2) 本プログラムを通じ本学からの派遣学生の単位申請と清華大学・KAIST の単位認定を確認した。

基準3 学習成果に関する取組状況

- 1) 受入れ学生、派遣学生に対する単位取得の状況調査を行った。
- 2) 3 大学間での学習制度を測定する方法の設定について、単位制度、成績管理、学位の面から制度的な比較を行った。
- 3) プログラム履修後の状況調査を行った。

基準4 内部質保証システムに関する取組状況

- 1) アドバイザリーボードを開催し、委員から本プログラムへの助言を受けた。(2013 年 1 月 18 日)
- 2) 情報発信として「TIER シンポジウム」を開催した。(2013 年 1 月 17 日)
- 3) 「**Appendix to the Implementation Guidelines of TKT CAMPUS Asia**」の整備が行われた。

Ⅱ 基準ごとの自己分析

基準 1 教育プログラムの目的
海外大学との共同教育プログラムの目的が明確に定められ、参加大学の間で共有されているか。

1. 基準 1に係る現況の説明

a) 教育プログラムの目的（育成する人材像を含む）の設定

- 「海外大学との共同教育プログラムの目的が明確に定められ、参加大学の間で共有されている」

本学と中華人民共和国の清華大学は東京工業大学・清華大学大学院合同プログラムという、大学院レベルではわが国初となるダブル・ディグリー（双方学位）プログラムを 2004 年 9 月に開始し、以来両大学の教職員間では緊密な質の保証と制度の確立を行ってきたという実績を持つ。韓国の KAIST との連携は、2009 年 7 月発足の香港科技大学、南洋理工大学、清華大学及び東京工業大学のアジア地域における理工系 5 大学からなるコンソーシアム（ASPIRE League）の枠組みとしては先行的な取組を行ってきた。こうした実績を踏まえ、かつ東アジアにおけるグローバル化の進展とそれに伴う人材育成の必要性を鑑み、三カ国協働の本プログラムへと発展的に移行することとなった。これらの最高水準の理工系大学との間における質の高い教育および研究の枠組み構築を通じ、将来的に東アジア地域に存在する諸問題に取り組む、卓越した科学技術の素養を持つグローバル人材の育成を目指している。

- 「プログラムの目的が、育成する人材像に求められる知識・スキル・態度等の学習成果も含めて明確にさだめられている」

本プログラムにおいては学生に対して学部時代から、修士号または博士号の学位を取得するまでの期間において指導を行うことにより、トップリーダーに向けたキャリア形成に資するものとなっている。「(1) 国際経験型教育プログラム」では、専門科目に加え「(a) セメスター単位の科目履修や研究室での実験等のプログラム」と「(b) 研究経験を含むサマープログラム」において、日本文化など我が国に速やかに馴染むような科目や環境研究など学際的なテーマによる講義中心の科目を提供し、さらに、自身が専門とする分野の研究者に属した形で研究指導を受けさせる。大学院学生向けのプログラム「(c) 大学院課程研究重視型教育プログラム」においては、既に研究テーマを決定し学位論文作成の段階にある学生を指導するが、一国一大学の一つの研究室に閉じこもることなく、他国の研究室に滞在し、その研究室の研究者と交流することにより、視野を広げ、国際的に活躍する独立した人材を育成する。この指導にあたっては、両大学の教員が連絡を取り合い、学生の指導にあたらなければならないとし、学位論文の形でこの経験が収斂するような制度設計が行われているところが特徴である。これらのプログラムを質の保証を伴いながら交流・連携をすすめていくための枠組みとして、受け入れ・派遣ともに「Study and Research Plan」および「Study and Research Record」を作成する。「Study and Research Plan」とは母校と受け入れ先の大学の指導教員の助言を受けながら、科目履修および研究計画を立案、留学期間中の指針とするものである。

「Study and Research Plan」についての協議も含め、KAIST、清華大学と 2012 年 1 月から 2013 年 2 月までの間に計 11 回、日本、中国、韓国で関係者の会談の場を持ち学費や宿舍利用などプログラムを支える実務的な面も含めて詳細な検討を重ねてきた。（添付採択プログラムの実施体制表参照）

- 「海外大学との国際的な共同による教育が必要であることが明確な目的となっている」

本学、清華大学、KAIST の 3 大学は、これまで教育および研究の交流において緊密な関係を維持・

発展させてきたが、本プログラムの実施により、その関係は更に深化・発展すると考えられる。

「(1) 国際経験型教育プログラム(a)、(b)」を通して、学部学生を含む学生の交流が、研究室間の交流と結びつくことにより、早い段階から国際的な研究経験の機会を与えることができ、また、「(c) 大学院過程研究重視型プログラム」において、大学院学生の相手大学での研究が、二大学間(3大学間)の交流の枠組みにおいて明確に位置づけられ、学生の研究活動の成果が、学位授与に向けた指導のプロセスにおいて適正に評価されることが見込まれる。

b) 教育プログラムの目的の大学間での共有

- 「教育プログラムの目的が、自大学の目的や国際化戦略の中に位置づけられ、関係者に共有されている」

2012年10月に公開された「東工大の国際戦略2012～「世界最高の理工系総合大学の実現」へ向けて～」の「3. 実行計画」「② 海外派遣の増加等による日本人グローバル理工人の輩出」「エ) 世界トップ大学への学生派遣」「ii) 清華大、KAIST 等との学生交流促進と連携構築」において、「2012 年度から、世界展開力強化事業「日中韓先進科学技術大学教育環」による東工大・清華大学・KAIST 間の日中韓の学生交流枠組みを構築し、例えば、清華大学との大学院合同プログラムの改善・拡大や同様の仕組みによるKAIST との連携を検討し当該3大学間等のアジアのトップ大学の学生交流を大幅に拡大する」と明記し全学的に共有されている。

以上のことから、基準1における本プログラムの取組状況は、プログラムの目的や育成する人材像を、参加大学間での調整の上で作成している、育成する人材像に期待される知識・スキル・態度等が明確にされている、目的は参加大学の教職員及び学生に周知され、共通見解になっている、という点で進展していると自己判定する。

2. 今後の課題点

すでに同様の内容は他の採択校からも指摘されているが、中国教育部と中国のキャンパス・アジア採択校との間では資金面での完全な合意が得られていない様子である。

現在は「長年の東工大との関係を重視して特別に」清華大学側は本プロジェクトがスタートした時点で約束であった経済援助を自発的に行っている。このような状態ではプロジェクトの安定的な運営と今後の持続可能な教育体制構築に不安が残る。ひとつの大学の取組では限界があることから、今後関係各所に助言や意見交換も求めていきたい。

基準 2 教育の実施
基準 2 - 1 実施体制
目的を達成するための体制が、参加大学等の間で適切に構築され、機能しているか。

1. 基準 2 - 1 に係る取組みの特徴

当プログラムは、3 大学共通の実施体制ガイドラインである「**Implementation Guidelines**」に集約されている取組みが特徴的である。内容は、1. 実施体制（プログラムプロジェクトリーダーの責務、合同委員会の設置、特定分野コーディネーター教員の役割等）、2. 交流形態、3. 交流学生数、4. 各大学が実施するプログラムの他大学への周知手順、5. プログラムアナウンスメント、学内選考、相手大学への通知、最終的な採否決定等の手順、6. 科目履修および研究実施に関する計画立案手順（指導教員の関与も含む）、7. **Study and Research Plan/Record** の利用手順、8. 学生の受入れ大学における身分（授業料、学生に対する滞在費および宿舍の支援など）、10. 受入れ大学による参加学生の科目履修及び研究世界を証明する文書の発行、11. 派遣元大学における参加学生の清華大学の認定、12. モニタリングの実施およびプログラム評価、13. 各国の所管する省庁や質保証機関との協力、14. 附属文書、15. 有効期間、である。

a) 組織体制

- 「参加大学間で運営体制や学生に対する責任、経費の配分等の基本的方針が協定等の文書等で明確化され、機能している」

本プログラム開始前からの 3 大学の協議を最終的な実施体制としての合意に達した点が特徴である。具体的には、2010 年 7 月および 2011 年 4 月には 3 大学の副学長クラスによって会合が行われ、合同プログラム実施について協議を行った。これらの会合においては、3 大学の単位、成績管理、学位授与等の制度についても情報を交換し、制度の整備に向けた検討がなされた。2011 年 7 月 8 日には本プログラム実施のため最終合意がなされ、「**Letter of Intent for Cooperation**」が 3 大学の国際担当の副学長の署名により正式に取り交わされた。上述した「**Implementation Guidelines**」という 3 大学共通のガイドライン作成について継続的な協議が行われ、2013 年 3 月 18 日には全項目での最終合意に達した。この中で質の保証についての取組みは 3 大学の代表により設置される合同委員会（**Joint Committee for TKT CAMPUS Asia Consortium**）を通して行われることが定められている。

- 「研究指導を行う場合には、参加大学間で指導教員体制が適切に構築され、連携が機能している」

派遣・受入れ学生は指導を希望する教員（所属研究室）と交渉、決定ののちに自ら「**Study and Research Plan**」を作成する。また、双方の指導教員は、研究面において協力関係があることが望ましいこと、双方の指導教員は指導の際には「**Study and Research Plan/Record**」を用いて指導に当たることなど、上述の「**Implementation Guidelines**」において合意されており、進展した取組みである。

- 「自大学において、教育プログラムの責任体制や学内の他部署（国際部署、評価部署、学生支援部署）等の関係や支援体制が明確になっている」

【外国人学生の受入れのための環境整備】本学では平成 14 年に国際室を設置して、大学国際化の推進に取り組んできた。平成 17 年には文部科学省「大学国際戦略本部強化事業」に採択され、それま

での企画・実施体制強化に加え、外国人留学生の教育・生活環境面における組織的な支援体制の拡充や、国際展開に対応する大学教職員の養成にも務めてきた。

【在籍管理】本学では平成 22 年度までに非正規学生（研究生等）の身分整理を行い、平成 23 年度からは正規学生、非正規学生ともに学務部において一元的な在籍管理を行っている。このため外国人学生についても、基本的な学内身分情報に加えて、奨学金受給状況、家族構成、査証有効期限などの情報を一括して把握管理しており、査証の更新時期が迫っている学生に対しては予め注意喚起を促すなど、適切な管理指導体制が構築されている。

【授業履修】本プログラムにより受け入れる学生は、日本滞在中の研究計画について予め受入れ教員と協議を行い、所属での修学状況を十分に鑑みつつ、研究を進める上で必要な講義課目を体系的に履修することが求められている（「Study and Research Plan」）。さらに本学では、近年の本学の国際交流事業の進展に伴う日本語が得意ではない留学生の受け入れ拡大状況を考慮し、現在では約 400 の英語による講義が開講され留学生を中心に履修されている。これら講義の履修案内、シラバス、講義資料等の情報はすべて英語で提供され、ウェブ上で閲覧可能となっている。

- 「参加大学間で定期的な会合等を行い、プログラムの運営方法や課題などを検討する体制が構築され、機能している」

3 大学のこれまでの会談は添付資料で示した大学（2 大学）間の会合の記録の通りであり、この他、電話やポリコム・ミーティング等を随時行い緊密な連携を図った実績を持つ。

b) 教職員

【外国人教員や国際的な教育研究の実績を有する日本人教員の採用実績】

平成16 年度：2 名、平成17 年度：4 名、平成18 年度：5 名

平成19 年度：7 名、平成20 年度：24 名、平成21 年度：27 名

本学の国際交流事業の推進に伴い、国際的な教育研究の実績を有する教員の採用実績が増加している。

【本プログラムで新たに雇用された教職員】

国際連携プランナー：1 名、プログラム・コーディネータ：1 名、留学アドバイザー：2 名

事務員：1 名

本プログラム関係の教職員は海外での長期留学経験や学位取得の実績があり、英語その他の言語に堪能な人員から構成される。

以上のことから、基準 2－1 における本プログラムの取組状況は、本プログラム遂行にあたって参加大学間で組織間の調整が定期的に行われており課題の共有や分担がなされていること、学内の関連部署と有機的に連携し支援体制を築いていること、国際的な教育を行うのに適切な能力を有する教職員が多数おり、教職員の国際的対応能力の育成が進められているという点で進展していると自己判定する。

2. 今後の課題点

ウェブなどを活用した本プログラムの広報強化と高校を対象とした広報・啓発活動を実施体制の中でより有効に組み合わせて活用していく。

基準 2－2 教育内容・方法

目的を達成するために適切な教育内容や教育方法が共同して検討され、実施されているか。

1. 基準 2－2に係る取組みの特徴

a) 教育内容・教育方法

●「育成する人材像」

本プログラムを通して育成される人材像は、世界的に活躍できる、卓越した科学技術の素養を持つグローバル人材である。本プロジェクトは、この目的のため、学部時代から、修士号または博士号の学位を取得するまでの期間において指導を行うことにより、その後のキャリアの形成に資することを目的にした実施体制を敷いている。

●「参加大学の間でカリキュラム校正や科目の情報を共有するとともに、ひとつのプログラムとして統合的・体系的な構成となるよう意図している」

全学の学部、研究科を対象とし、「(a)セメスター単位の科目履修や研究室での実験等のプログラム」、「(b)研究経験を含むサマープログラム」、「(c)大学院課程研究重視型教育プログラム（大学院共同指導プログラム）」の三つの枠組みにより実施している。これらの枠組みは、参加学生の教育研究水準の発展の対応したものとなっており、(a)、(b)のプログラムの参加者の多くは初めての海外経験になるため、日本を初めて訪れる者にとっても抵抗無く参加できる工夫を行った。例えば、単位取得可能なカリキュラムの設定については3大学で協議の上、参加する学生の専門とそのレベルを考慮した基礎から最先端の科学技術までを学ぶことの出来る授業と研究課題を用意するだけではなく、訪問国の文化や語学を学べるようなプログラムも整備された。すなわち、清華大学では物質科学の基礎と応用に加えて中国語会話の授業や、KAIST では情報科学や生命科学の最先端を学ぶと共に、外国人のための韓国語と韓国文化、さらには修士論文や博士論文レベルの研究課題を実行するプログラムも設定された。また本学では、学生の専門分野や日本語入門のカリキュラムに加え、本学の得意とする最先端分野、例えば、環境エネルギー、バッテリー、ナノテクノロジー、自然災害対策などについて、全学レベルからプログラムを作り上げ、専門外の学生にも理解してもらえるような授業を用意した。また、科学技術の推進からキャリアパスまでを網羅する内容を、日本とアジアと欧米の文化背景を比較しながら議論する授業も開講した。さらに、3大学ともに、学外に出てその国の文化や最先端の研究開発現場を実体験してもらうプログラムも実施された。

●「各国の言語や文化・社会の教育が効果的に行われている」

本学では日本文化などの留学生にとって興味深い科目を取り入れている。一例を挙げると2012年はプロの落語家（立川志の春）氏を招聘して、すべて英語で行う落語と「日本の笑いとは？」というテーマで各国からの留学生と笑いをめぐるクロスカルチャータークを行った。

授業後は各学生が専門とする分野の研究室に所属して研究指導を受け、同時にセメスター単位で英語で開講された多くの科目から選択できる環境を提供した。

「(2) 大学院課程共同指導プログラム」は、すでに研究テーマを決定し、学位論文作成の段階にある学生を指導することを目的としたものである。自国のひとつの研究室に閉じこもり研究に没頭することなく、他国の研究室に滞在し、その研究室の研究者と交流することにより、視野を広げ、国際的

に活躍する独立した人材を育成することを目的としている。この指導にあたっては、派遣・受入れの両大学の教員が連絡を取り合い、学生の指導にあたらなければならないとし、学位論文の形でこの経験が収斂するよう制度設計が行われている。また修学の前後に「**Study and Research Plan/Record (研究計画と修了報告)**」を提出させ、自立した人材の育成を推進した。清華大学に派遣された学生は生命理工学と物質科学に関するテーマを実施し、KAIST に派遣された学生はコンピュータ科学と生物科学に関するテーマを実施し、それぞれの大学と本学の教員とで今後も引き続き共同研究のもと学生交流へと展開する例も出て来ている。

b) 学生受入れ

- 「実際に受け入れた学生の構成やその学力水準（語学力を含む）が、教育プログラムの目的や教育内容に適合したものとなっている」

「(1) サマープログラムを中心とした教育研究プログラム」では、清華大学から 3 名、KAIST から 5 名を受入れ、「(2) 大学院課程共同指導プログラム」では、清華大学から 4 名、KAIST から 3 名を受入れた。それぞれの専門分野における学力水準は語学力も含め、優秀なレベルにあり、与えられた課題に対するレポートや各学生の研究成果を口頭発表する機会には、英語でのプレゼンテーション能力も高く評価された。特に研究室での研究活動と習得した専門の授業としては、機械設計や制御システム、材料力学、情報科学などの分野で高い学習能力を発揮した。それは学生の来日以前から清華大学と KAIST から派遣される学生の専門分野の情報交換が行われ、またその情報に即した本学の多くの担当教員の協力が得られたことによる。

以上のことから、基準 2-2 における本プログラムの取組状況は、参加大学間でカリキュラムを共同して検討し教育プログラムの目的を実現するために適切な教育内容となっている、国際的な共同を伴うことで実現しうる教育が行われている、国際的な共同教育に有効な教育方法が工夫されている、教育内容・方法と学習成果との関係が明確に分析されている、計画した学生数が確保されており、参加学生の選抜方針を調整して各大学で実施しているという点で進展していると自己判定する。

2. 今後の課題点

派遣、受入れ両方の募集要項がわかりにくいという学生からの問い合わせがあったことから、より交流実態に即した形でわかりやすい募集要項の記述を行い、専用ウェブページなどで周知を図る。

また、学生が各大学に派遣される前に、現地での授業や研究の概要について事前に把握できるよう、3 大学での情報共有をさらに強化していく。

基準 2－3 学習・生活支援

学生が適切に学べる環境を形成し、学習・生活面の支援を行っているか。

1. 基準 2－3に係る現況の説明

a) 学習支援

●「海外から受け入れる外国人学生に対して、履修指導、教育支援者・TA の配置、語学研修や補修等の追加指導、学内各種資料の翻訳や諸手続きの支援等の各種の学習支援を実施している」

1) 外国人学生の出願手続きを一部オンライン化し、就学に当たって必要書類の英文化の充実を図った。

2) 清華大学、KAIST との間で学生提出用として共通に使用する「**Study and Research Plan/Record**」の様式を整え、受入れ・派遣双方向において利用を促進した。

「**Study and Research Plan**」とは、世界展開力強化事業により派遣される学生が、効果的に科目履修や研究活動を行うために作成する文書である。派遣学生については、派遣前に本学の指導教員の助言を受けることに加え、派遣先大学の指導教員と連絡を取り合い（科目履修のみで派遣先大学に指導教員がいない場合を除く）、また、必要に応じ本学の指導教員の助言を受けながら、「**Study and Research Plan**」に沿って科目履修、研究を行い、終了時には、その成果について「**Study and Research Record**」を作成し提出する。受け入れ学生に対しても母校において同様の手順でもって「**Study and Research Plan**」を作成し、東京工業大学における修学・研究の指針とすることが3大学間の合意で取り決められており、現在運用中である。

b) 生活支援

●「留学生に対する生活支援」

1) 新たに来日する留学生に対しては、受入れを依頼する研究室にチューターの選定を依頼、決定後は事前説明会等のチューター教育を行って、修学・生活支援を行った。

2) 学生のカウンセリングは従前より学生支援センター生活支援部門において日本人・外国人の分け隔てなく実施している。学外の専門相談員による 24 時間対応の電話相談も整っている。（共に英語対応可）

3) 本プログラムによる留学生向け民間宿舎について検討・比較を行い、契約を行った。

平成 24 年度東京工業大学では、本プログラムとして 15 名、月数にすると、54 ヶ月分の受入れを行った。本プログラムにおいて本学が留学生に提供する宿舎は民間からの借り上げが基本である。保証人・敷金礼金不要・家具付きで短期滞在が可能であるシェアハウスタイプを採用し、効率的な運用が可能となっている。このようなシェアハウスでは、一般の、本学学生ではない日本人の学生や社会人が居住しているため、日本の社会生活などを感じることができるといった利点がある。昨年度の参加学生からは、日本文化、料理などを学ぶ機会が得られて大変良い日常経験をした、等の感想をサマープログラムアンケートその他で多く得ている。

4) 留学生向け宿舎・生活関連オリエンテーションなどの実施。

留学生に対しては来日後すぐに、宿舎担当部門から宿舎での共同生活における注意事項のオリエンテーションと、大学において 110 番や 119 番、地震時の対応などの緊急情報を含む日本の生活に関する一般情報のオリエンテーションを行っている。また、適当な機会（提出物、イベントな

ど)を作って、自然に学生から生活の様子を聞き、精神的なサポートを提供する工夫を行っている。

5) 奨学金と宿舎に関しては、昨年度は基本的に毎月 8 万円の支給と宿舎の無償提供を行った。

●「派遣学生に対する支援」

1) 留学希望者に対しては、従前より国際部において一般的な留学相談の他、奨学金情報、留学先大学の選択、授業履修プロセス、留学中の各種相談、帰国後の単位認定方法などの相談にのる等、留学前から帰国後まで一貫した支援体制をとっている。また本学からの派遣学生に対しては渡航時期にあわせほぼ個別に事前留学研修を行っている。

2) 留学中の学生とは、メールにより派遣担当および国際部と定期的に連絡を取り、安否確認、修学、生活上の各種相談に応じている。派遣学生のすべては定期レポートの送付が義務付けられており、国際連携プランナーがそれらにコメント・返信する体制になっている。

3) 清華大学では「バディ」という名称で本学のチューターと同様の修学・生活面でのサポートを行う学生が配置され、KAIST では研究室に所属することで研究・生活面で一体的なサポートを受けることができることが確認されている。

4) 奨学金に関しては、清華大学では一般交換留学生 1,700 円/月、高級交換留学生（修士号を有し、研究のみの学生を指す）2,000 円/月が支給される。KAIST では学部生 800,000Won/月、大学院生 900,000Won/月が支給される。宿舎について、清華大学はキャンパス内の留学生専用の寮が無償提供される。KAIST はキャンパス内の宿舎（二人部屋）に入居可能で、費用は KAIST からの奨学金より支払うことになっている。

5) 安全対策への注意喚起

特にテロや感染症など海外における危機管理教育には力を注いでいる。その際には「東工大生のための安全な海外渡航の手引き」を活用している。

以上のことから、基準 2－3 における本プログラムの取組状況は、参加大学間で履修に必要な情報を事前に共有し履修指導を適切に行っていること、移動する学生への研修・TA 等の支援が参加大学間で連携して実施されており、各種施設・設備などの学習環境も適切に提供されていること、また奨学金や宿舎等の住居支援がすべての学生に対してあり、その他の情報が体系的に提供されているという点で進展していると自己判定する。

2. 今後の課題点

受入れ学生に対する今後の課題としては、宿舎確保のための来日時期の調整が挙げられる。民間宿舎は月極めの支払いであることから、月末に来日する際の確保が困難なことがあるためである。

本学から派遣する学生に対する今後の課題としては、従来は学生からの質問を個別に回答を行ってきたが、現在は本プログラムの進展とともに寄せられる質問の傾向性も明らかになってきたため、情報集約を行い専用 HP を通じて適切な情報提供を図る。

海外滞在時の安全対策、危機管理がますます重要な課題になっていることから従前からの「東工大生のための安全な海外渡航の手引き」の大幅なりニューアルと内容の周知徹底を行い、派遣が予定される学生に対して本学指定の海外旅行保険と危機管理サービスに学生負担で加入を求める。

基準 2－4 単位互換・成績評価

単位の取得や海外大学等との互換方法、成績評価の方法および海外大学等との互換方法が定められ、機能しているか。

1. 基準 2－4に係る現況の説明

a) 単位認定・互換

- 「海外大学で取得した単位について、その教育内容を踏まえて単位互換を行うシステムが構築されている」

【日本側学生が中韓大学から帰国した際の単位認定方法】

学部における帰国後の単位認定手続きは、「東京工業大学学部学生の留学に関する取扱いについて」に基づく。「単位の認定は、教授会（学科の授業科目に該当する場合は、学科会議及び教授会、全学科目に該当する場合は、当該全学科目の実施委員会及び全学科目教育協議会）の議を経て、学長が行う。認定された授業科目の成績評価の表示は、「認定」とする。」大学院における帰国後の単位認定手続きも同規定に基づき、学生の指導教員を含めた3名の大学院担当教員が行い「認定」とする。

外国の大学に留学して履修した授業科目の単位認定を受けようとする学部学生は、留学の期間の開始前に、履修する授業科目のシラバス等を添えて、学科長又は類主任（全学科目に該当する場合は、当該全学科目の実施委員会委員長）に申し出て必要な指導を受けるとともに、留学の期間終了後は速やかに、所定の申請書により、教務課を通じ学長に申請する。

以上は、本学共通の履修の認定の手順であり、「日中韓先進科学技術大学教育環」プログラムにおいても、同様の手順としている。

本プログラムでは、3大学合同で複数回の直接会合ならびに協議検討の結果、3大学の構想責任者のサインのもと **Implementation Guidelines** をまとめるに至っている。そこでは単位互換についても3大学間の共通認識として、学生を派遣する大学は、受入れ大学における教育と研究ならびにそれに伴う単位評価の質の保証を尊重し、積極的に単位互換を推進することに同意している。その結果、平成24年度に本学より派遣を行った学生(清華大学5名、KAIST7名)のうち、清華大学派遣学生1名、KAIST派遣学生1名が帰国後、滞在先で履修した科目の単位認定を本学で申請し、清華大学派遣学生は現在認定待ち、KAIST派遣学生は単位認定が完了している。

また本学が受入れた学生では、サマープログラムにおいて清華大学学生2人が研究経験を単位認定され、大学院課程共同指導プログラムでは同じく清華大学からの学生1名が履修科目の単位認定があったとの報告を受けている。

【中国・韓国の学生が、日本で取得した単位を持ち帰った際の、単位認定方法】

○ KAIST

【授業科目履修】

派遣先大学で取得した授業科目と同様の授業科目を担当する教授または当該学科・専攻長が承認を行う。成績評価は、合格／不合格である。

【研究実施】

学部の場合、アカデミックアドバイザー教員または学科長、大学院の場合には当該研究科の研究ア

ドバイザー教員が承認を行う。成績評価は、合格／不合格である。

○ 清華大学

【授業科目履修】

派遣先大学で取得した授業科目については、教務担当部署および所属学科・専攻において、同様の、あるいは関連した清華大学の授業科目として認定される。

【研究実施】

夏季休暇期間および冬季休暇期間において派遣先大学で実施した研究成果については、1週間の研究に対し1単位を認定できることとしている。この認定は単位相当分としての推定を行うもので、5単位を上限としている。認定手続きは、教務担当部署および関連の専攻等において行なわれる。

以上のように、単位の実質化に向けた各種取組みが各参加大学にて行われており、教育内容やその水準を踏まえた上で単位互換を行うシステムが構築されており、成績評価の厳格化に向けた取組みが各参加大学で行われており、成績評価方法を踏まえた成績の互換を行うシステムが構築されている。

b) 成績評価・学位授与

本学では、平成24年度のサマープログラム開始時より、3大学間で教育と研究の質の保証を保ちつつより多くの単位互換が行われるよう、清華大学とKAISTと共に、成績評価方法と単位互換の状況把握に務めて来た。詳しくは **Implementation Guidelines** とその **Appendix** にまとめられているが、3大学共に、留学中に得られた授業単位の互換条件は、自身の大学の中に同様の内容の授業があり、かつ同程度の時間を費やして得られた単位であることを基本としている。

その点、例えば本サマープログラム用に新設した、本学の得意とする最先端分野や、文化背景を比較しながらキャリアパスまでを議論する授業は、内容としては有意義でも、同様の内容の授業が見当たらない場合も考えられる。また数字の上で具体的な基本単位数として、1授業当り2単位とする本学と清華大学（2～3単位）は単位数に単位互換性があるのに対して、KAISTは1授業当り3単位としているために、本学の認める1授業2単位が、KAISTでは1単位不足していると判断された経緯もある。すなわち、本学の学生がKAISTで取得した単位は本学で互換認定され、KAISTから来日した学生が本学で取得した単位はKAISTでは認められにくいとなる。その点も含めて、3大学間で単位互換が可能な授業と単位数を事前に想定しておく議論が必要であるという共通認識に至っている。また、本学に留学した学生の中では、本学で取得した単位を自身の大学に持ち帰り単位互換認定を申請するということをあまり意識せずに来日した学生も少なくなく、3大学共に本プログラムの目指す所を学生にも十分周知する必要性を認識している。

以上のことから、基準2－4における本プログラムの取り組み状況は、単位の実質化に向けた各種取組みが各参加大学にて行われており、教育内容やその水準を踏まえた上で単位互換を行うシステムが構築されていること、成績評価の厳格化に向けた取組みが各参加大学にて行われており、成績評価方法を踏まえた成績の互換を行うシステムが構築されているという点から進展していると自己判定する。

2. 今後の課題点

現況では上述の通り、日中韓で単位認定をめぐって相互理解が確立されていることから、今後単位認定の申請がより活発に行われることが予想される。今後一層の単位互換の活性化を図りたい。

基準3 学習成果

教育プログラムの目的に即して学習成果を測定する方法を設定し、成果が適切にあがっているか。

1. 基準3に係る現況の説明

a) 学習成果の測定と結果

●「参加学生の単位取得の状況を把握することにより、学生の学習状況を分析している」

【受入れ学生】「(1) 国際経験型教育プログラム」および「(2) 大学院課程（修士、博士）学生を対象とした研究を重点に置いた教育プログラム」（英語ではそれぞれ **Summer Program** 及び **Joint Educational Program**）の参加学生に対して、2013年3月末までの滞在者を対象にアンケートを実施し、状況を把握すると共に分析を行った。

(1) Summer Program：回答者の属性：8名（全員男性、学部生）、平均年齢：21.8歳

(2) Joint Educational Program：回答者の属性：7名（男性5名、女性2名）、平均年齢：22.4歳

質問1：「東工大での研究活動は、所属大学において科目履修として単位認定されましたか」

回答：「認定された：2、申請しなかった：4」

質問2「東工大での研究は、学位取得に向けて肯定的なインパクトがありましたか」

回答：「インパクトがあった：5 インパクトがなかった：1」

以上の回答が得られている。また受け入れ学生の研究室指導教員にもアンケートを実施しており、学生と指導教員双方の意見を併せて学生の学習状況を分析している。総じて、本学の研究活動については世界の最先端レベルを経験する良い機会を提供し、単位互換については3大学で事前の調整が必要という共通認識に至っている。

なお、昨年度のキャンパス・アジア参加学生の研究成果については、専用HPで公開している。

(http://www.ipo.titech.ac.jp/campusasia/student_presentations/detail_601.html)

【派遣学生】単位取得の状況は添付の基礎データ表を参照されたい。また、清華大学及びKAISTに派遣し帰国した学生に対しては単位取得状況、単位互換状況、プログラム向上のためのサジェスションなどの質問を含むアンケートを実施した。（該当学生7名中5名から回答あり）回答が得られた学生全員からは留学中に履修した授業が本学で単位化されることを希望していた。また学生はすべて滞在先での使用言語である中国語、韓国語の授業を履修しており、語学と文化の教育については3大学すべて共通に徹底されている。

●「プログラムとして期待される学習成果を踏まえ、学習成果を測定する方法を適切に設定し、継続的に測定している」

【単位制度】3大学は、多くの共通性が見られるが、一方でそれぞれの教育理念を反映した特徴差も見受けられる。最終的には学生の派遣元となる大学が、単位の認定の可否を決定する権限を持つこととしている。この扱いは、単一の換算式により自動的に単位を認定するものではないことから、ともすると交流学生にとって相手大学での履修成果が何単位で認定されるかという見通しを立てにくいという問題が起こりがちである。たとえば清華大学にはひとつの授業で4単位というものがあるが、東工大には実験や卒論研究といった特殊なものを除いて4単位の授業は存在しない。ただし清華大学の授業は1つの授業で週に2回、合計180分あるので重さは東工大における4単位と同等である。こう

いった特徴差を本プログラムにおいては「(1) 国際経験型教育プログラム(a)、(b)」、「(c)大学院課程研究重視型教育プログラム」のいずれにおいても、双方の大学の指導教員が個々の学生の科目履修、研究実施について派遣前から連絡を取り合うこととしている。これにより、派遣前、派遣期間中、そして帰国後にわたる期間、指導教員を通して科目履修の助言を受けられる体制とし、科目履修や研究活動の成果が無駄になることがない制度としている。なお、これに関して双方の指導教員は、「**Study and Research Plan**」を交わすこととしている。この「**Study and Research Plan**」は「**Learning Agreement**」にある科目履修に加え、研究計画を含めることにより、科目履修と研究活動を一体化するものとなっている。

【成績管理】3 大学ともに履修要件を設け、厳格な管理を行っている。3 大学の成績管理制度は、共通性は高いが、必ずしも同一ではない（例えば評点の付しかたについて若干の差異が認められる）。従って、学習成果を適正に認定するためには相互に相手大学が発行する成績証明書をいかに適正に自大学において読み替えるかが問題となる。この手順についても、3 大学の間では既に交換留学プログラムや合同学位プログラムを通して十分な実績がある。これらを踏まえ、本学においては昨年度受け入れた留学生に対して学長名による「**Academic Record**」を成績証明書として発行している。

【学位】基本的には学生が入学した大学が授与するものであるが、「(c)大学院課程研究重視型教育プログラム」については、複数大学が共同で教育研究の指導を行うプログラムであることから、相手大学からも学位が授与されることも考えて、意見交換を行っている。本学は、平成 16 年以降、清華大学との間で合同学位プログラムを実施しており、平成 24 年度末までに入学者 129 名、修了者数は 92 名という実績を持つ。また、KAIST は欧米の大学を中心に 36 の合同プログラムを実施している。これらの経験に基づき、本プログラムにおいて共同指導を受ける学生が二つの大学に正規課程学生として在籍し、学位を取得することも重要な論点の一つである。

b) プログラム履修後の状況

- 「短期留学（セメスター単位の交流プログラムやサマープログラム等）においては、留学終了後の調査（満足調査やその後の学習状況の把握等）を行い、その結果を教育内容や指導方法の改善へ活用している」

冒頭 a)の学習成果の測定と結果で既に記述したアンケートを **Summer Program** 及び **Joint Educational Program** 参加学生及び受入れ研究室指導教員に実施し、分析がなされている。

以上のことから、基準 3 における本プログラムの取り組み状況は、学習成果の測定方法について教職員や学生へ詳細に説明がなされ、必要な情報が集められている、参加大学間で同様の判断基準で学習成果が判断されている、プログラムの目的に対して適切な学習成果が得られている、学習の履修・単位取得状況と学習成果の関係を分析し、教育内容や指導方法の改善を活用している、また学生のプログラム卒業・修了後の状況を定期的に把握し、その結果を共有している点から進展していると自己判定する。

2. 今後の課題点

単位取得方法や認定方法は、制度の違いから単位認定までに時間がかかるなどの困難の報告を受けている。その点を 3 大学間で協議し、より円滑な単位認定につなげたい。

昨年度派遣した学生が全員帰国後には改めてアンケート調査を実施し、今後の本プログラムの運用に活用することなどが挙げられる。

基準4 内部質保証システム

内部質保証や改善のための体系的な取組みが、参加大学との連携のもとで行われ、機能しているか。

1. 基準4に係る現況の説明

a) 内部質保証システムの体制

昨年度のサマープログラム、及びその後行ったフォローアップアンケートが今年度も実施される方向である。

●「参加大学間の連携の下で、定期的に外部者（助言委員会を含む）によるレビューが行われている」

プログラム開始の初年度は、2013年1月18日に本学で漢陽大学の Prof. Seung Soon Im、NY州立大学中村俊雄教授、慶應義塾大学小尾晋之介教授がリーディングメンバーとして、オブザーバーとしてジョージア工科大学の Prof. Brian Woodall、Stanford Japan Center の Prof. Andrew Horvat に参加して頂き、アドバイザリーボード・ミーティングが開催され、本プログラムについての評価と今後のアドバイスを頂き、本学出席者とともに意見交換を行った。

●「当該プログラムの教育内容や学生の交流成果・教育効果の情報を適切な形で公表・発信することにより、社会で広く理解されるようになっている」

本プログラムの成果発信のため、2013年1月17日に本学でシンポジウム「世界水準の大学間の協力を通じたグローバル理工系人材の育成」“**Cultivating Global Leaders through World-Class University Collaborations**”を開催した。そこで、大学間の質の保証を伴う教育の交流、理工系リーダー教育について、アジア、欧米の大学より講演者を招聘し各大学の先端的取組みの知見を共有し、意見交換を行った。その際、シンポジウムや翌日に開催されたアドバイザリーボードを通じ3大学間で共通する課題を共有し、今後のプログラムの発展に資することが確認された。

b) 改善実績・将来計画

●「レビュー結果が参加大学間で共有され、改善へ活用されている」

昨年度は本プログラムの開始年度で、レビューが年度末に実施されたため、レビュー結果は3大学間で共有されたが、改善への活用は今年度から実行となる。しかしながら本プログラム開始より3大学間における会合などを通じて「**Appendix to the Implementation Guidelines of TKT CAMPUS Asia Consortium**」の項目の整備がなされてきた。最新版は2013年3月14日に改定されたものである。内容は、3大学のプログラム概要－Forms of exchanges, Academic calendar(2012-2013), Status of exchange students, Financial Support, Recognition procedure of the credits obtained at partner univ.(Coursework/Research activities)と教育制度の違い－Semester system/Requirements for graduation(Semester system/Number of academic years for graduation/Number of credits for graduation) Credit system/Credit transfer system(Number of credits per class/Definition of credit/Calculation of credit/Limit of credit recognition/Regulation on credit recognition/ Formula of credit recognition), Grading System (Form of Grades/GPA system)である。これらの項目すべてについて3大学は確認しあっており、今後本プログラムの充実に活用される予定である。

●「プログラムの波及効果」

本プログラムは日中韓3カ国の大学間で実施されるものであるが、本調書の3ページ「このプログラムは、本学が長期的な目標の下、米国、ヨーロッパ、そして他のアジア地域における最高水準の理工系大学との間で行う教育研究の連携協力構想と一体的に実施されるものである。昨年度はサマープログラムという形で、一体的な学生の受入れの取り組みを行った」との記載通り、本学が別途遂行中である他の国際交流事業と一体化して行う部分が多くある。一例を挙げると、昨年度末の2月26日から3月8日にかけて実施された「先進理工系大学体験型短期派遣」プログラムという本学学生の米国大学への超短期派遣プログラムへの参加を通して、参加学生の国際交流に向けての意識が非常に高まった。それらの参加学生（男子学生5名、女子学生5名）は今年度のサマープログラムへのチューター業務や国際交流に関する各種のプログラムに向けて非常に積極的な役割を担う意思を表明している。

以上のことから、基準4における本プログラムの取り組み状況は、学生との詳細な意見交換や学習成果の測定方法に対する分析を行うとともに、外部者によるレビューが行われ、分析に基づいた提言を受け、改善に活用していること、レビュー結果を踏まえた、参加大学で連携してプログラムの改善計画を作成しており、学内の必要な部署に提供され、フィードバックを得ていること、プログラム実施の効果がプログラム参加学生以外にも一部得られていること、また、プログラムの継続計画が検討されているという点で進展していると自己判定する。

2. 今後の課題点

昨年度は受入れた学生を中心にアンケートやフォローアップアンケートを実施したが、派遣学生に対しては単位認定について小規模なアンケートを実施したのみである。派遣学生の派遣期間がサマープログラム中心の受入れ学生と異なり、現地滞在中の学生も多かったことからであるが、6月までには昨年度派遣した学生が全員帰国する予定であるので、受入れ学生と同様のアンケートを実施し、今後より良い内部質保証システム構築に活かす方針である。

また、TIER シンポジウムやアドバイザリーボードで受けた提言、一例を挙げると「受入れ学生の日本企業への英語でのインターンシップ実施」については現在実現に向けて進展中である。

情報の公表・発信については平成25年からは専用HPをリニューアルし、今後の活動をすばやくコンテンツとして活用していく。

基礎データ票

[大学名]

東京工業大学

(中国側大学)

清華大学

(韓国側大学)

韓国科学技術院 (KAIST)

[構想名]

日中韓先進科学技術大学教育環

1. 構想全体における交流学生数(実績)

(単位:人)

平成23年度		平成24年度	
受入	派遣	受入	派遣
0	0	15	12

2. 奨学金・宿舍提供の状況

(単位:人)

(1)奨学金を受けている学生数		平成23年度		平成24年度	
		受入	派遣	受入	派遣
		0	0	15	11
内訳	日中韓三国共通の財政支援受給者	0	0	3	6
	大学による奨学金	0	0	0	1
	その他の奨学金	0	0	12	4

(2)宿舍(大学所有の宿舍、大学借り上げによる宿舍等)を提供されている学生数		平成23年度		平成24年度	
		受入	派遣	受入	派遣
		0	0	15	12

3. 個別の交流プログラムの概況

※色の見方 外国人学生の受入れ(中韓⇒日本) 日本人学生の派遣(日本⇒中韓)

受入/ 派遣	相手国	平成23年度				平成24年度			
		第3四半期		第4四半期		第1四半期		第2四半期	
受入	中国							① 3	
								② 2	
	韓国								③ 2
							④ 5		
派遣	中国								⑤ 1
									⑥ 2
								① 2	
								② 1	
	韓国								③ 1
									④ 1
								⑤ 3	
								⑥ 1	
								⑦ 1	
									⑧ 1
									⑨ 1

外国人学生の受入れ(中韓⇒日本)							日本人学生の派遣(日本⇒中韓)								
No.	交流期間		派遣元	交流内容	取得可能 単位数	学生交流数		No.	交流期間		派遣先	交流内容	取得可能 単位数	学生交流数	
	始期	終期				計画値	実績		始期	終期				計画値	実績
①	24.07	24.08	中国	サマープログラム	6	5	3	①	24.08	25.07	中国	授業と研究	20	5	2
②	24.08	25.01	中国	大学院共同指導プログラム	上限なし		2	②	24.09	25.02	中国	授業と研究	20		1
③	24.10	25.02	中国	大学院共同指導プログラム	上限なし		2	③	24.12	24.12	中国	研究中心	20		1
④	24.06	24.08	韓国	サマープログラム	6	5	5	④	25.02	26.01	中国	研究中心	20	上限なし	1
⑤	24.09	24.12	韓国	大学院共同指導プログラム	上限なし		1	⑤	24.08	24.09	韓国	サマープログラム ※複数パターンあり			3
⑥	24.10	25.02	韓国	大学院共同指導プログラム	上限なし		2	⑥	24.08	24.12	韓国	研究中心			1
							⑦	24.08	24.10	韓国	研究中心	1			
							⑧	24.12	25.02	韓国	研究中心(冬季研究)	1			
								⑨	25.03	25.06	韓国	授業と研究			1

「キャンパス・アジア」モニタリング自己分析書別添資料 授業科目一覧表

1. 中国・韓国から受け入れた学生が単位取得した、日本側の授業科目(受入)

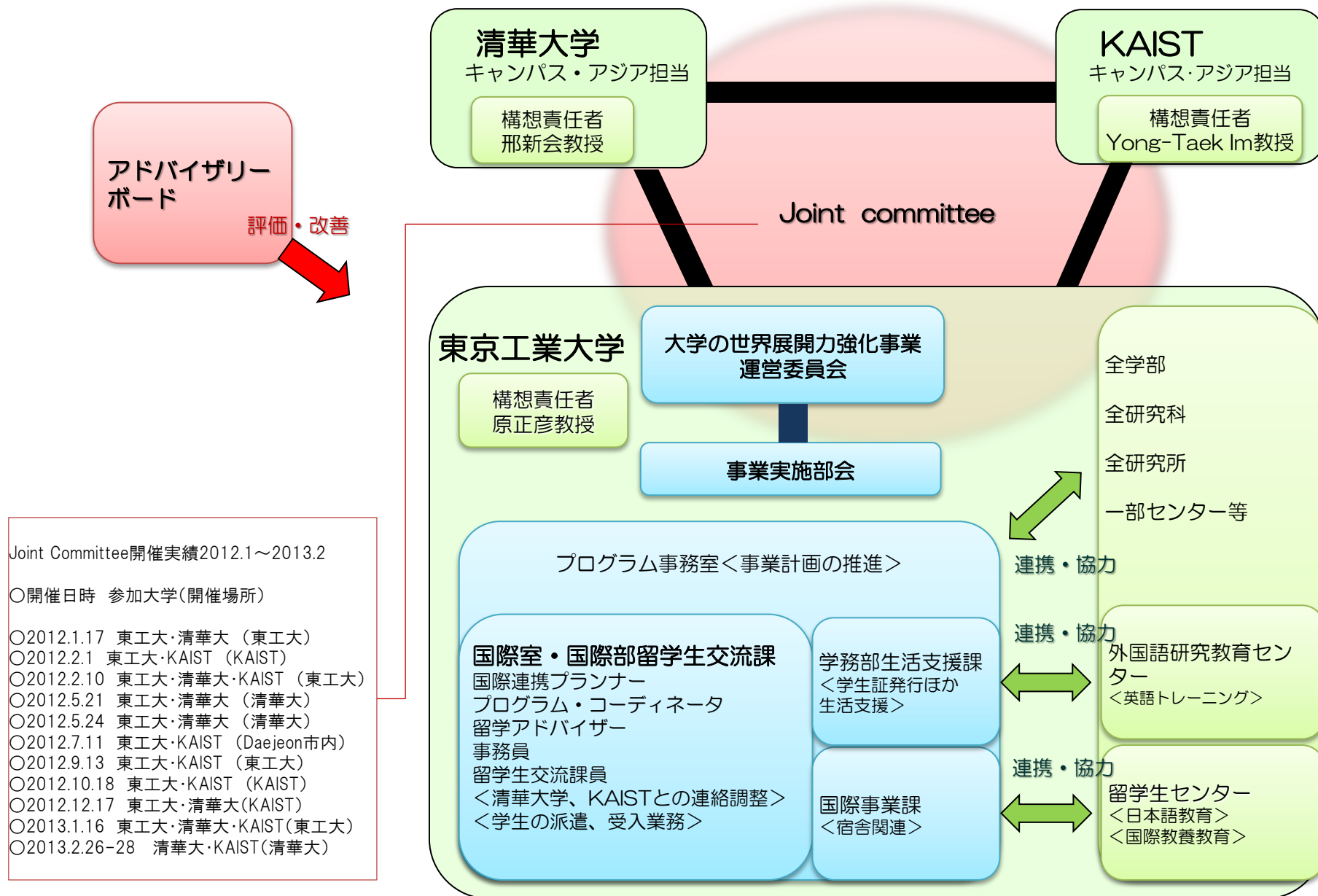
	開講大学	授業科目の名称	教授言語	担当教員	受講年次	学期(半期／通年)	必修／選択	取得可能単位	単位取得者数
1	東京工業大学	Survival Japanese 2	英語	佐藤礼子、山口真紀	サマープログラム	サマープログラム	必修	2	8
2	東京工業大学	Survival Japanese 3	英語	佐藤礼子、山口真紀	サマープログラム	サマープログラム	必修	1	8
3	東京工業大学	Advanced Technology at Tokyo Tech	英語	竹添秀雄、腰原伸也、他	サマープログラム	サマープログラム	必修	2	8
4	東京工業大学	Modern Japan	英語	Haiwon Lee、OLAFKARTHAUS、他	サマープログラム	サマープログラム	必修	1	8
5	東京工業大学	Intensive Thermal Engineering	英語	平井 秀一郎、佐藤 勲、他	大学院	後学期	選択	2	2
6	東京工業大学	独創機械設計プロジェクト第二	日本語	大熊 政明、武田 行生、他	学部	後学期	選択	3	2
7	東京工業大学	流体科学第二	日本語	矢部 孝、大島 修造	学部	後学期	選択	2	2
8	東京工業大学	設計と生産の工学第一	日本語	齋藤 義夫、岩附 信行、他	学部	後学期	選択	5	2
9	東京工業大学	材料力学特別講義B	英語	中村 春夫	大学院	後学期	選択	1	1
10	東京工業大学	Advanced Course of Mechanics of Materials	英語	岸本 喜久雄	大学院	後学期	選択	1	1
11	東京工業大学	Linear Fracture Mechanics	英語	轟 章、水谷 義弘	大学院	後学期	選択	1	1
12	東京工業大学	Creative Design for Innovation	英語	Celine Mougenot	大学院	後学期	選択	1	1
13	東京工業大学	Project in Creative Design for Innovation	英語	Celine Mougenot	大学院	後学期	選択	1	1
14	東京工業大学	Human brain functions and their measurements	英語	葭田 貴子	大学院	後学期	選択	2	1
15	東京工業大学	機械制御システム講究第二	-	吉野 雅彦(指導教員)	大学院	後学期	選択	2	1
16	東京工業大学	Advanced Course of Inverse Problems	英語	天谷 賢治	大学院	後学期	選択	1	1
17	東京工業大学	機械学習	英語	村田 剛志	大学院	後学期	選択	2	1
18	東京工業大学	Advanced Topics in Intelligence Sciences I	英語	新田 克己、長橋 宏、他	大学院	後学期	選択	2	1
19	東京工業大学	IPISE Seminar (IP) I	-	長橋 宏(指導教員)	大学院	後学期	選択	2	1
20	東京工業大学	Japanese Beginner 1 Autumn	日本語	吉沢 由香里	大学院	後学期	選択	2	1

2. 中国・韓国に留学した学生が相手先大学で単位取得した、中国・韓国側の授業科目(派遣)

	開講大学	授業科目の名称	教授言語	担当教員	受講年次	学期(半期／通年)	必修／選択	取得可能単位	単位取得者数
1	清華大学	Fundamentals of Materials Science (1)	中国語	Xiaodan Sun	学部2年以上	秋セメスター	選択	4	1
2	清華大学	Speaking Chinese (2)	中国語	複数教員	Chinese Language Program における初級	秋セメスター	選択	4	1
3	KAIST	Introduction to Computer Application	英語	Soon Joo Hyun	サマープログラム	夏セメスター	選択	3	2
4	KAIST	Basic Korean and Korean Culture	英語	EunYoung Lee	サマープログラム	夏セメスター	選択	2	2
5	KAIST	Individual Study	英語	YongTaek Im	サマープログラム	夏セメスター	選択	1	1
6	KAIST	Introductory Korean for Foreigners I	英語	DeokShin Kim	韓国語入門生	秋セメスター	選択	3	1
7	KAIST	Topics in Life Science III	英語	SangYong Jon	専攻選択科目	秋セメスター	選択	3	1
8	KAIST	Ph.d. Thesis Research	英語	HakSung Kim	博士課程学生	秋セメスター	選択	9	1
9	KAIST	M.S. Thesis	英語	ChunGon Kim	修士課程学生	秋セメスター	選択	9	1

「キャンパス・アジア」モニタリング自己分析書別添資料 実施体制表

①プログラム運営体制図（平成24年度末）



「キャンパス・アジア」モニタリング自己分析書別添資料 実施体制表
②日本側のプログラム運営組織のメンバー表(平成24年度末)

1. 大学の世界展開力強化事業運営委員会 メンバー表

	所 属	職 名	氏 名	備 考
1	理事・副学長(教育・国際担当)	教授	丸山 俊夫	
2	副学長総括補佐	教授	三原 久和	委員長
3	大学院理工学研究科工学系長・工学部長	教授	岸本 喜久雄	
4	総合理工学研究科 物質電子化学専攻	教授	原 正彦	構想責任者
5	大学院理工学研究科 数学専攻	教授	黒川 信重	
6	大学院理工学研究科 材料工学専攻	教授	須佐 匡裕	
7	大学院理工学研究科 化学工学専攻	教授	関口 秀俊	
8	大学院理工学研究科 共通講座	教授	CROSS Jeffrey Scott	
9	大学院情報理工学研究科 計算工学専攻	教授	徳永 健伸	
10	大学院社会理工学研究科 人間行動システム専攻	教授	中川 正宣	
11	大学院イノベーションマネジメント研究科 技術経営専攻	教授	比嘉 邦彦	
12	学術国際情報センター	教授	山口しのぶ	
13	留学生センター	教授	武井 直紀	
14	外国語研究教育センター	准教授	薩摩 竜郎	
15	大学マネジメントセンター	教授	遠藤 悟	
16	大学マネジメントセンター	准教授	HOPE Thomas Edwin	
17	国際室	特任教授	廣瀬 幸夫	
18	国際室	特任准教授	西野 可奈	国際連携プランナー
19	国際部	部長	金子 忠利	
20	国際部国際連携課	課長	塚田 由佳	
21	国際部留学生交流課	課長	青木 彰	
22	国際部国際事業課	課長	塚田 由佳	
23	学務部	部長	江澤 治正	
24	学務部教務課	課長	延 善洋	
25	国際室	国際連携コーディネーター	平澤 徳	

2. 大学の世界展開力強化事業事業実施部会 メンバー表

	所 属 名	職 名	氏 名	備 考
1	副学長総括補佐	教授	三原 久和	
2	総合理工学研究科 物質電子化学専攻	教授	原 正彦	構想責任者/事業実施部会主査
3	大学院社会理工学研究科 人間行動システム専攻	教授	中川 正宣	
4	大学マネジメントセンター	教授	遠藤 悟	
5	大学マネジメントセンター	准教授	HOPE Thomas Edwin	
6	国際室	特任教授	廣瀬 幸夫	
7	国際室	特任准教授	西野 可奈	国際連携プランナー
8	国際部	部長	金子 忠利	
9	国際部留学生交流課	課長	青木 彰	
10	国際室	国際連携コーディネーター	平澤 徳	

3. プログラム事務室(事務実施体制)

	所 属 名	職 名	氏 名	備考
1	国際部留学生交流課事業推進グループ	グループ長	坂本 桃子	
2	国際部留学生交流課事業推進グループ	主査	渡部 千夏	
3	国際部留学生交流課事業推進グループ	スタッフ	藤原 有美子	
4	国際部留学生交流課事業推進グループ	教育研究支援員	叶 少瑜	プログラム・コーディネーター
5	国際部留学生交流課事業推進グループ	教育研究支援員	岩崎 あかね	留学アドバイザー
6	国際部国際事業課国際基盤グループ	教育研究支援員	山本 礼	留学アドバイザー
7	国際部留学生交流課事業推進グループ	事務員	山崎 理恵	事務員